

文法重視の英語ライティング教材
—原著：Who's (...oops!) Whose Grammar Book Is This Anyway?—

奥田 純*

An English Writing Reference Book Emphasizing Grammar:
A Book Review of *Who's (...oops!) Whose Grammar Book Is This Anyway?*

Jun Okuda

本書評では、米国の社会人向けに書かれた英文ライティング実用書を取りあげたが、英語を母国語としない外国人である日本人にとっても、英文法を重視し、その上にとった英語の修辭法を展開する本書が英語のライティング教材、参考書として有益である点を論じた。併せて、全文 419 ページに及ぶ原著をこの観点で利用するための読書法にも言及している。

Key words: 英語ライティング、英文法、英文修辭法

英作文と英語ライティングの違いとは何であろうか？英作文は、まず日本語で書かれた文章があり、それをいかに正しい英語に置き換えるかといういわば和文英訳の世界である。一方、英語のライティングとは、どのようにして正しい英語で読者に分かる英文を書くかという文章術の世界である。英語圏で英語を母国語として教育を受けた人間にはそれは国語での作文とも言うべき科目である。

そうした英語を母国語として使っている社会人向けに書かれたのが、*Who's (...oops!) Whose Grammar Book Is This Anyway?* (副題：All the Grammar You Need to Succeed in Life) という本稿書評の対象となる書物である。著者は C. Edward Good で、弁護士資格を有する米国法曹界のベテランで、裁判官を初めとする法律専門家にきちんとした分かりやすい英語の書き方などをテーマにして講演、演習を行っている。現役の裁判官が自らの言葉で書く文章を第三者に添削してもらうということは考えにくいかもしれないが、そこはオープンな国である米国のことで、次のよう英文は「悪文」として指弾される。

The court reversed the lower court and ruled that consent is not required.

(当裁判所は下級審判決を覆し、同意は不要との判決を下した。) (注 1)

著者が薦める文章は、

The court reversed the lower court, ruling that consent is not required.

である。

正しい英語という点では悪文とされた英文でも問題ないではないかというのもまず妥当な指摘であろう。ことに母国語として英語を繰るというのでなければ、これで十分かもしれない。しかし、著者は、reversed と ruled と 1 文の中で動詞を上記のようなスタイルで重ねるのが悪い癖だと断罪している。著者の薦める修正は、英文法で言う分詞構文である。本書では *Subordination* と呼ばれる文修飾の一つで、英語のライティング技法上欠かせぬ修辭として第一に挙げているものだ。

英文法では、分詞構文はそれ自体独立した項目として詳細に説明がなされ種々の用法があることが例示される。しかし、本書ではライティングを修辭学のように捉え、英文法に合った、英文法を巧みに利用した修辭法を展開している。この点が正に外国語として英語を学び、英文を書こうとする者にとっても極めて参考になる所以である。英語にせよ、いかなる言語でもこれを外国語として学習しようとする場合、一定のレベルからは文法

* 四條畷学園短期大学 ライフデザイン総合学科

を学ぶことがその言語を理解し、読み書きできるようになるための早道であり、王道であろう。

ただ、文法だけ学ぶのは学習者の意欲をそぎ、大抵長続きすることがない。それは、学習上の動機付けが普通の学習者の目的と合致していないからだ。英語で会話をしたい、英語を聴けて英語でコミュニケーションしたいと思っている人間からみれば、精緻な分詞構文の話を開けば聞くほど英語への親しみを失くさせる逆効果しか生まない可能性が大である。英語で直接現下の情勢を知りたい、英語で書かれたものを翻訳を通さず直に読みたい、こうした目的意識や意図を持つ者にとって、余りに細かい文法の話は払い下げ願いたいものでしかないだろう。英語のライティングの力を付けたいと思っている者にしても、むやみに文法的な話は閉口するだろう。スポーツにたとえれば、テニスを習いたいのに、基礎体力が付きテニスの動きにも役立つからと、ラケットをふる喜びは教えられず、うさぎ跳びだけをさせられればうんざりするはずだ。

本書は、いわばラケットを振る喜びを随所に散りばめながら、しかし、一方でどうすればバックハンドで球を切り返し、あるいはネット際に進んで巧みなボレーを扱えるのか技術的なコーチをしようとするのに似ている。ラケットの持ち方、振り方、体の動かし方といった技術を実戦に即して教えようとするものだ。この技術にあたるのが文法である。

名詞、動詞、形容詞、副詞、前置詞といった8品詞や句 (Phrase) と節 (Clause) の違いを知り、単一語と複合語による修飾、現在分詞や過去分詞の用法も基本的な文法事項として結局は必要となる。こうした文法用語が並びはじめるとすぐに興ざめする人も多いだろう。

そこで、本書の読み方として評者はまず第3節の文体論 (A Theory of Style) から読み始めることを提唱したい。第15章がこの節の振り出しの章であるが、序説は要らない、肝心なところをまず読みたいという人は第16章から始めるとよい。

John hit the ball.

(ジョンは投球を打った。)

この簡単な文章から、次のような英文に至るまでの過程が、文法の力を借りながら、どのようにして小学生でも書ける文から、小学生では書けな

い英文ライティングに到達できるのかが体系的に詳述されている。

His knees shaking with nervous energy,
big John, the reserve catcher,
powerfully hit the slow ball over the
fence in the bottom of the ninth to win the
ALC championship game before 50,000
screaming fans.

(緊張のあまり膝を震わせながら、9回裏歓声を上げる5万人のファンの前で控えのキャッチャーであった大柄なジョンが遅い球を力いっぱいひっぱたくとボールはフェンスを越え、アメリカン・リーグのリーグ決定戦の勝利につながった。)(注2)

イタリック体で下線付きの(評者による)単語が元々の簡単な英文を構成していたものだが、分詞構文、形容詞、同格(名詞の並列)、副詞、前置詞句、to不定詞という一連の修飾語・語句を従えることによって(この意味で *Subordination* という言い方を著者はしている)、英文に膨らみができ、1文で多くのことが表現されうることになったのだ。

本書は、この後第17章で動名詞、名詞節を巧みに用いる手法、第18章で並列的な文構造を用いる修辭法を説明し、こうした技法、手法を随所に用いたライティングを目指すべきであるとしている。本書ではチャーチルの英文が名文、ライティングの手本として引用されているが、次の文は並列的な文構造を用いる修辭法の一例として挙げられている。

**In manner gentle, in temper tolerant,
in mood humane, in outlook broad and
comprehending, he nevertheless,
possessed and exercised an inflexible
will and an imperturbable daring.**

(優雅なやり方で、我慢強い気質で、人間的な感情を抱き、広い包括的な展望をもちながら、彼はそれでも揺るぎない意思と冷静沈着な大胆さを堅持、行使した。)(注3)

このチャーチルのような名文はことに英語を外国語とする者にはまず到達し得ない類のライティングではあるが、英文法をそれなりに活用し、そ

れなりの練習に励めば英文ライティングの術は少なくとも進歩するはずだ。また、文法を知った上での修辞法に慣れることにより英文の読解にも役立つという副産物を期待しうる。

本書は全文 419 ページにわたるが、詳細な索引も付され、修辞、文法双方の専門用語により該当の本分に当たれる仕組みとしている。きちんと文法から始めて修辞法に進みたい読者は第 1 ページから読み進めるべきであろう。だが、それでは躓いてしまうと思われる読者には、上記のような読み方を薦めたい。詳細な文法知識が欲しければ、目次と索引を頼りに本書で詳述している箇所にとどりつけるはずだ。いつも悩まされる動詞の活用が文の構造を理解する上では、手ごろな磁石や地図の役割を果たしていることに驚きを覚えるかもしれない。文法にも思わぬ嬉しい驚きが隠されている。

米国社会人向けの実用ライティング手引き書と銘打って題された、やや口語的な表題（注 4）の本書ではあるが、内容的には深みのあるライティング参考書となっている。

（注 1） C. Edward Good, *Who's (...oops!) Whose Grammar Book Is This Anyway?*, (New York, Fine Communications, 2002) p.271
（ ）内の和訳は評者によるもので、以下の原文の翻訳も同様評者によるもの。

（注 2） *Ibid.*, p.268 本書第 16 章では、この後関係名詞節等を用いたより複雑な文章も紹介しているが、文法的には正しくても、余りに冗長な文も、過度の修飾として排している。

（注 3） *Ibid.*, p.293 この引用された英文では 4 つの前置詞句が並列的に文頭に置かれ、述語動詞が並列的に用いられ、且つ二つの並列的な名詞が二つの動詞の目的語にもなっている。

（注 4） *Who's (...oops!)* という本書の表題の出だしは *Whose* とすべきところを *Who's* にしたので「あっ、いけない！」という意味。*oops!* というのは間違えたりしたときに咄嗟に発する言葉で、普通は話し言葉でしか使わず、本の題とするには口語的過ぎる。